つとめて、なほも（副詞 係助）あらじ（ラ変・未 打消意思「じ」終）と（格助）思ひて（四段・用 接助）、
嘆きつつ（四段・用 接助）ひとり寝る（下二・体）夜の（格助）あくる（下二・体）間は（係助）
いかに久しきもの（形シク・体）と（格助）かは（係助）知る（四段・体）（副詞）
と（格助）、例より（格助 係助）は（係助）ひき繕ひて（接頭語＋四段・用 接助）書きて（四段・用 接助）、うつろひたる（四段・用 存続「たり」体）
菊にさし（四段・用）たり（格助 完了「たり」終）。返り言、
「明くるまでも（下二・体 副助 係助）も（係助）試みむと（上一・未 意思「む」終 格助）しつれど（サ変・用 完了「つ」已 接助）、とみなる（形動ナリ・体）
召し使ひの（格助）来合ひたり（四段・用 完了「たり」用）つれば（完了「つ」已 接助）なむ（係助）。いと（副詞）
ことわりなりつる（完了「つ」体）は（係助）。（形動ナリ・用）
げにや（間助）げに（副詞 副詞）冬の（格助）夜ならぬ（打消「ず」体 断定「なり」未）まきの（格助）戸も（係助）
おそくあくる（下二・体）は（係助）わびしかりけり（詠嘆「けり」終）（ラ変・終 形ク・用 形シク・用）
さても、いとあやしかりつる（完了「つ」体）ほどに（格助）、ことなしび（上二・用）
たる。しばしは（副詞 係助）、忍び（四段・用）たるさまに（格助）、「内裏（うち）に（格助）。」
など（副助）言ひつつ（四段・用 接助）ぞ（係助）あるべき（ラ変・体 当然「べし」体）を（接助）、いとどしう（形シク・用（ウ音便））
心づきなく（形ク・用）思ふ（四段・体）ことぞ（係助）、限りなき（形ク・体）や（間助）。

翌朝、やはりこのままではいられないと思って、
嘆きながら一人で寝る夜が明けるまでの間が
どれほど長いものか（あなたは）お分かりですか
（分からないでしょうね）
と、いつもより改まって書いて、色あせた菊に
挿して送った。返事は、
「夜が明けるまで待とうとしたけれど、急用を告げる
召使いが来合せたので。（あなたが怒るのも）
たいへんもっともなことです。
本当に、冬の夜ではないけれど、まきの戸も
遅く開くの（を待つの）はつらいことですよ
それにしても、たいへん不思議なくらい、何事も
ない様子であった。
しばらくは、（他の女のもとに通うのを）隠している
様子で、「宮中に。」
などと言いながらであるべきなのに、ますます
不愉快に思うことは、この上ないことだよ。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/